

第101回全国高校野球選手権 愛知大会 地元校の横顔



一色

今度は、まずは初戦を突破して紙面を飾りたい。大会の台風の目になれるか。それには投手陣のデキが鍵。

投手は、左腕の二枚看板。「ダブルエース」と言ってもいい。

まず一人目は、身長170センチ、体重53キロの森晴紀投手で、直球、カーブ、スライダー、チェンジアップを自由自在に操る。

投げ方は、本人によるとスリークオーター。

森投手は、走者が居ても居なくても常にセットポジションで打者へ投げる。その時、ピッチャーズプレートの一塁側へ近い位置に軸足を置く。

得意なボールは「右バッターのインコースへのクロスファイア」。

広辞苑でクロスファイアを引くと「野球で投球技術の一。ホームプレート上を外角から内角へ、内角から外角へと斜めに横切るように投げること。十字火投法」とあった。

記者の森投手のマウンドでの印象は「緩急の差が巧みで、制球力は二重丸。さらけけん制も上手い」

背番号1は「一勝でも多く勝てるようがんばりたい」と静かに闘志を燃やしている。

もう一人のサウスポーター藤彰摩投手は身長175センチ。長い腕をムチのように使い、ストレートの現在の球速は135キロ。

オーバーハンドの齋藤投手は好投手として注目されていることについて「うれしいが結果が付いてこない」と。結果を出せるようがんばりたい」とズバリ。

そんなタイプの異なる左腕にサインを出し、ミットを構える扇の要は羽柴直斗捕手で両左腕をリードしていて「楽しい」と話す。

大会中、高低、左右、緩急などをミックスしてどう使うか、捕手として腕の見せ所だ。

また、羽柴選手は打っては四番で、捕手としての読みを生かした打撃にも期待がかかる。

こうした魅力たっぷりのチームを見事にまとめる川合健斗主将は、投手に最も

Table with columns: 背番号, 位置, 学年, 氏名, 投・打, 出身中学. Lists 20 players including 森晴紀, 羽柴直斗, 中嶋優輝, etc.

部長 坂元直樹 監督 渡辺大祐
主将 川合健斗 記録員 山本智恵



番森晴紀、八番中根英幸、九番中嶋優輝。

渡辺監督は名経大市郎について「粘り強く、部員の人数が多いうえ」としながら「グラウンドにいるのは(それぞれ)9人。スタンドに何人いようが関係ない」

近い三塁手だ。川合主将は「ぼくたちが1年生の時も2年生の時もコールド負けで終わってしまった。まず一勝できるようチーム一丸となって勝ちたい」と話す。初戦の相手は、部員が多いという名経大市郎。予想される一色高の打順はこうだ。一番山本将大、二番川合健斗、三番朝岡力、四番羽柴直斗、五番齋藤彰摩、六番杉田利緒、七

(高校野球担当・浦野文昭)

加藤 晴明 高校生  
(愛知県西尾市) 17歳

修学旅行で訪れた沖縄は自然が豊かで、とてもきれいな海が広がっていた。美しい海水浴場では沖縄でしか見られないような変わった魚がいた。名物の沖縄そばを食べて本土には全く違う食文化に驚いた。南の島の

今を十分に満喫しつつ、過去を知るにつけ僕は生きるとしての意味をいろいろと考えなくてはならぬ。

### 沖縄の苦難 伝えていこう

戦後しばらくの間は米国の一部となり、その名残でもある米軍は今も駐留している。こんな理不尽なことが南の島で起る。あつていいの。僕は沖縄でうかがったことを、多くの人に伝えていかなければならない。もうない戦争で無念にも亡くなった人は報われない気がする。そんな先人の死を無駄にしないことが現代を生きての僕の使命なのだと南の島で思った。

### 心に残る沖縄の食文化

石本友彦 高校生  
(愛知県西尾市) 17歳

一日三回の修学旅行で沖縄に行きました。特に私の心に残ったものは、日頃食っていてもとは全く異なっていた沖縄の食文化でした。

最初に食べたのは味付けした豚肉が入ったソーキそばでした。見た目は普通のそばのようでしたが、口に入るとみだり少しくっついた食感がしました。とてもおいしかったです。

一日三回はタコスの具や

### 沖縄の見方 180度変わる

榊原 友希 高校生  
(愛知県西尾市) 17歳

修学旅行で訪れるまでの沖縄のイメージとは全く異なる戦争があったこと、海がものすごくきれいなこと、とても暑い場所らしいこと。

実際に訪れてみて僕の見方、考え方は百八十度変わりました。

### 戦争僕たちも語り継ぐ

河原 草斗 高校生  
(愛知県西尾市) 16歳

修学旅行で僕は沖縄に行きました。空を見上げると次々と銃が撃たれ、空から落ちてきた爆弾が吹き飛ばす音が聞こえてきました。

僕は今を生きながら、戦争を語り継いでいこうと思います。

### 沖縄戦胸を刺す生の声

中嶋 空輝 高校生  
(愛知県西尾市) 16歳

五月二十八日、米軍により沖縄の首里城は陥落しました。沖縄は戦後の二十七年間、米国の一部となり、沖縄の人たちは生きながらに戦争を体験した女性もいました。

戦争が終わってもアメリカ人などの病気で沖縄の人たちは次々と命を落としました。沖縄は戦後の二十七年間、米国の一部となり、沖縄の人たちは生きながらに戦争を体験した女性もいました。

### 沖縄から学ぶ平和は今

沖繩戦の体験者による

地面は死体だらけだった。家族や友達が犠牲に飛散した。何回も涙が止まらなかった。平和は日々を暮らすことではない。平和は心を豊かにすること。

平和は日々を暮らすことではない。平和は心を豊かにすること。

### 沖縄で戦禍を知った

高島 心 高校生  
(愛知県西尾市) 16歳

修学旅行で訪れた沖縄で平和の大切さを知りました。沖縄戦の体験者から話を聞いて、戦争の怖さを知りました。

平和の大切さを知りました。戦争の怖さを知りました。

### ひめゆりの悲劇に衝撃

尾崎 紅葉 高校生  
(愛知県西尾市) 16歳

修学旅行で沖縄を訪れたひめゆりの戦争の話を聞いて、とても衝撃を受けました。

ひめゆりの悲劇に衝撃を受けました。

## 第2学年 修学旅行の思い出

7/21~8/23の中日新聞に掲載

された。一色高生の作文です。

## 赤い電車グッズ販売

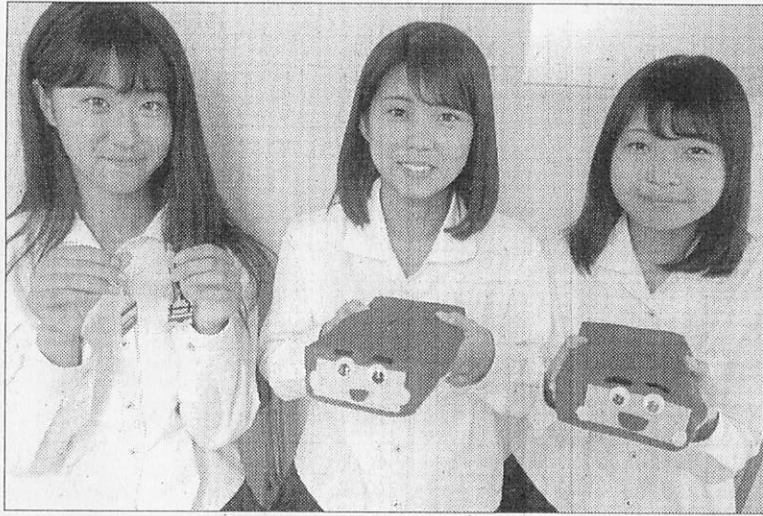
一色高生 8日の鉄研イべで

名鉄西尾・蒲郡線の存続への応援で、県立一色高校(村瀬正幸校長)の生徒が、赤い電車をイメージしたオリジナル手づくりグッズを今年も製作。8日に幡豆中学校を会場にして開催される第6回鉄研イベントの会場で販売する。

が家庭クラブ活動の一環として、応援グッズを毎年開発。今年は「赤い電車キーホルダー」(1個50円)などを販売する。

高校生との交流会に参加した子どもたち先着30人は生徒手作りの「ティッシュボックス・カバー」をプレゼントする。

生活デザイン科111人



講師の岡安且憲さんが、目の前でシュークリーム作り方を教えてくれた



二つのクリームがスクラム

# 洋菓子作る

一色高の生徒

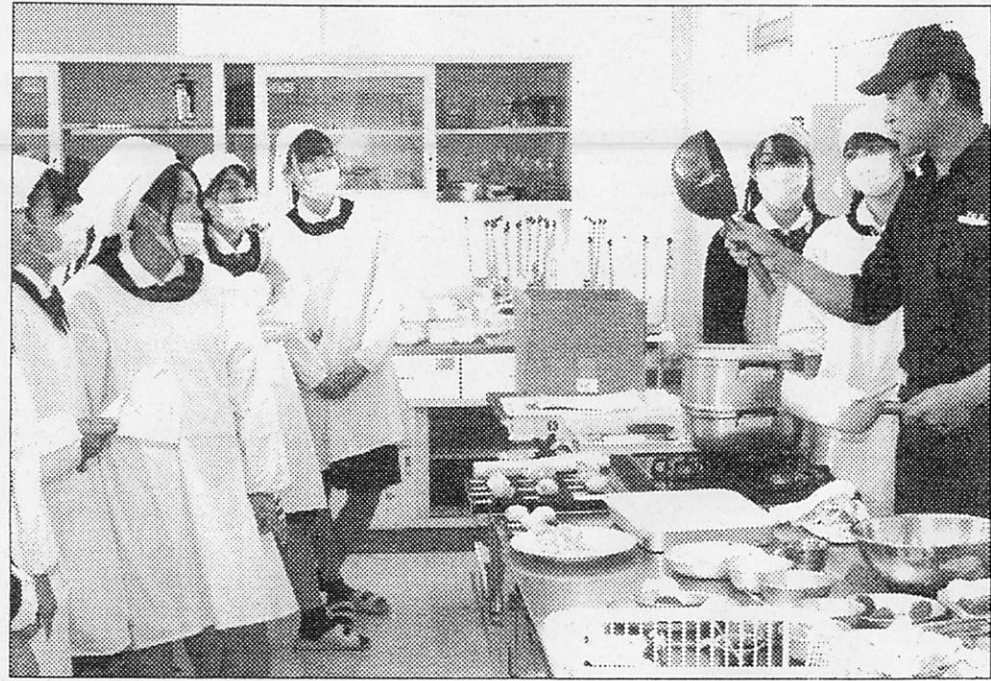
洋菓子が美味しく出来る「方程式」を習いました。

恒例の洋菓子講習会が8日、県立一色高校であった。講師はコック帽がトレードマークの岡安且憲さん

(44)

その岡安さんがオーナーシェフを務めるお菓子の店「オカヤス」末広町の「ミルクレープ」は、果物たっぷり、そして甘さすっきりで男性にも支持されているほか、秋の定番「モンブラン」は不動の人気。

この日は、同校生活デザイン科3年生38人がシュークリームの作り方を覚えた。出来上がったシュークリームは、味の変化が楽しいカスタードクリームと生クリームが二層になった「ダブルシュークリーム」だった。



21日、県立一色高校で行われた和菓子講習会

# 洋菓子の次は和菓子

## 一色高生活デザイン科3年生

この時間は教科書を伏せて。教科書は目の前に―。

和菓子講習会が21日、県立一色高校で行われた。

同校生活デザイン科3年生38人が、地元の半田屋Ⅱ

一色町一色Ⅱ店主鈴木貴博さんから「くるみモチ」などの作り方を学んだ。

なお、同校生活デザイン科3年生は去る10月8日、お菓子の店オカヤスⅡ末広

町Ⅱのオーナーシェフ岡安且憲さんにシュークリームの作り方を習ったばかり。柔軟な十代が2カ月連続でプロの技を吸収した。  
(浦野文昭)

# 和菓子作りに挑戦

一色高 3年生 「半田屋」鈴木さんに学ぶ

県立一色高校の生活デザイン科三年生三十八人が二十一日、西尾市一色町の老舗和菓子店「半田屋」の店主・鈴木貴博さん(54)を講師に和菓子

作りを学んだ。写真。教科「調理」の一環で、和菓子の専門的知識・技術に触れ、和菓子作りを



通して日本の菓子文化を学ぼうと、平成八年度から鈴木さんを講師に迎えて行われており、本年度

で二十三回目になる。

この日は、求肥(ぎゅうひ)を使った「くるみ餅」と上生菓子の練切「手まり菊」「もみじ山」の三種類に挑戦。鈴木さんから和菓子の歴史や文化について学んだあと、蒸し方や練り方に注意しながらくるみ餅、昨年度から取り入れた技法「包みぼかし」の入った練切をそれぞれ仕上げた。

鈴木さんは「求肥が使えるようになると、和菓子作りのレパートリーが一気に広がる。練切は季節に合わせた色合いで仕上げる、はやりのSNS映えもする。家庭でも和菓子を手作りしてほしい」と話していた。

スポーツいつしき、一色高校

# 地域活性化で連携協定

## 初の取り組み 県下取り

小松理事長はあいさつで、運営状況として中学生から40代までの参加者が少ない現状をあげ、「一色高校の協力で若い人たちの活動によるクラブの活性化を期待

したい」と説明。村瀬校長は連携に感謝しながら「部活動で培った技術、能力を着実に継承していく地域の原動力にしていきたい」と強調した。



【写真は、協定書を手にするスポーツクラブいつしきの小松理事長(中央左)と一色高校の村瀬校長(同右)】

## 地域創生へ和太鼓からスタート

NPO法人スポーツクラブいつしき(小松宏之理事長)と県立一色高校(村瀬正幸校長)は2日、生涯学習と学校教育のつながりで異世代交流をうながし、地域のスポーツと文化の発展継承に向けた連携協定を結んだ。愛知県内の公立高校では新たな地域創生を目指す初の試み。和太鼓での連携からスタートし、他の活動への広がりを含めた展開を目指す。

愛知県の認証を受けて2007年9月に発足したスポーツクラブいつしきは、一色町内の体育施設を拠点に、地域住民の健康で明るい生活を目指してスポーツ文化の振興を推進。現在は卓球やバレーボール、バドミントンなどの15サークルが活動している。

一色高校の和太鼓部「いつしき」は地域の支援を受けながら年60回にも及ぶ公演などを15年間にわたって展開。スポーツクラブいつしきが2年ほど前、部員OBGの受け皿で和太鼓サークルの立ち上げをきっかけとして、今後の人材育成を視野に入れた今回の協定の締結となった。

一色高校であった調印式にはスポーツクラブいつしきから高須英人事務局長、学校側からは本多滋明教頭が同席した。記名を終えた

# 文化・スポーツの担い手に

## 一色高 地元NPOと連携協定

地域におけるスポーツ・文化振興の担い手を育成しようと、県立一色

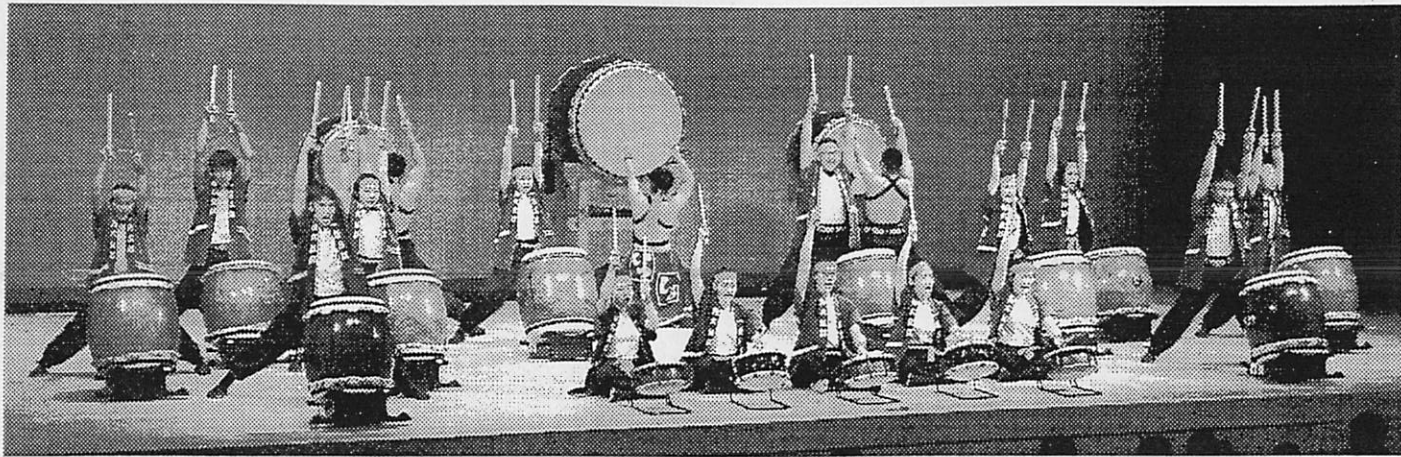
高校(村瀬正幸校長)は二日、西尾市一色町のNPO法人「スポーツクラブいっしき」

と連携協定を結んだ。公立高校と地域NPOとの連携は、県内で例がないという。

(小松宏之理事長)と連携協定を結んだ。公立高校と地域NPOとの連携は、県内で例がないという。

協定では、地域社会のスポーツ・文化の発展・継承や地域社会の活性化に役立つ活動などについて連携することになっている。当面は和太鼓関係の連携から始め、今後の成果を見ながら他の活動も含めて、具体的な連携策を検討していく。

同校では「両機関の連携で生涯学習と学校教育とのつながりを生み出し、活力ある個性豊かな地域社会のスポーツ・文化の発展・継承に役立つ担い手を育成し、新たな



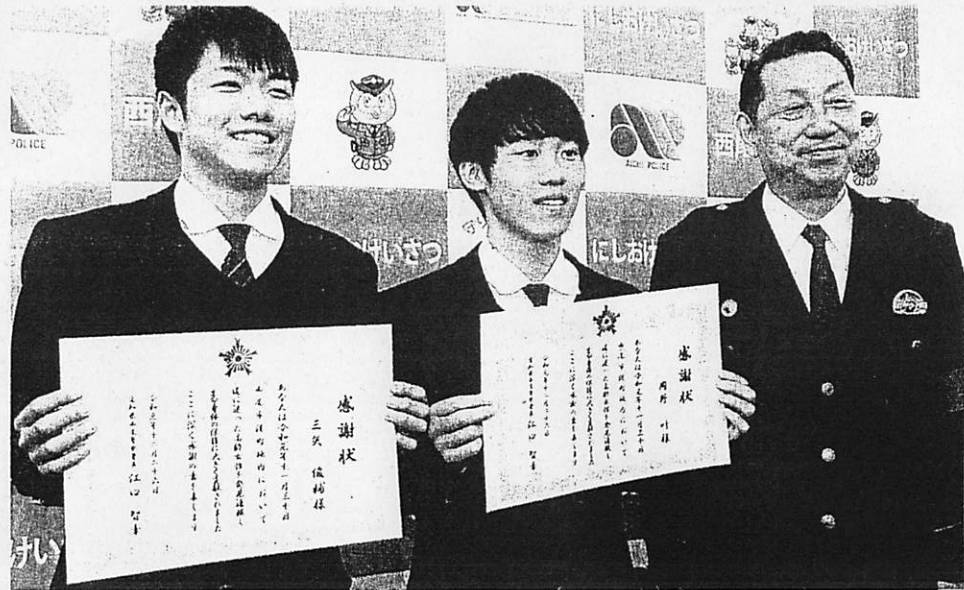
卒業後も継続でき、地域の人材育成・伝統文化継承に寄与できるよう、同校では新しい取り組みが必要だと考えた。

地域におけるスポーツ・文化振興のためには、地域住民の異世代間交流を促し、その担

今年3月に行われた一色高校和太鼓部「いっしき」の公演Ⅱ西尾市一色地域交流センターで



# 行方不明者に声掛け お手柄 西尾署 一色高生2人に感謝状



感謝状を受け取り、笑顔を見せる三矢さん(左)と岡野さん(中)＝西尾署で

行方不明者の発見に尽力したとして、西尾署は二十六日、いずれも一色高校二年生で、西尾市一色町の三矢俊輔さん(二セ)と、同市寺津町の岡野叶さん(二セ)に感謝状を贈った。

署によると、二人は十一月二十日午後七時ごろ、西尾市港町で、一人で歩いている女性(ハミ)を発見。周辺は工場などが立ち並び、民家はほとんどなく普段は歩く人もいない。

不思議に思っって声を掛

け、自宅を尋ねるが、「分からない」と答えたため警察に届けた。二人は近くでサッカーをして自転車で帰る途中。発見が遅ければ凍死など命にかかわる可能性もあったという。

西尾署で江口智章署長から感謝状を受け取った三矢さんは「声を掛けただけで感謝状までもらえてうれし」と笑顔。岡野さんは「役に立ててよかった」と話した。

# 西尾署 徘徊高齢者の保護に協力

## 一色 2 高年 三矢、岡野さんへ感謝状



江口署長からの感謝状を手にする三矢さん(左)、岡野さん=西尾署で

西尾署(江口智章署長)は26日、道に迷った83歳女性性の保護への協力で県立一色高校2年の三矢俊輔さん

(17)一色町と岡野叶さん(17)寺津町に署長感謝状を贈った。二人は11月30日午後7時

ごろ、西尾市港町の路上を一人で歩く女性を発見。海岸線近くにある周辺は民家のない工場地帯で、不審に

思って「こんばんは」「おうちは分かりますか」などと声かけをした。女性が自宅住所などについて「分からない」と答えたため、西尾署に通報した。女性の家族からは同日午後、行方不明届けが出ていた。

同署であった贈呈式では、江口署長が目没などから人命にも関わる状況をあげ、「勇気を出しての声かけに感謝します」と称えた。感謝状を受け取った二人は、近くのグラウンドで友人らとサッカーをして自車で帰宅途中、真っ暗の中で女性を発見した当時の様子を説明しながら「当たり前のことをしただけ」「役に立ってうれしい」と目を細めた。

# ハート打ちます

## 一色高和太鼓部「いっしき」第14回演奏会

### 入場無料 来場歓迎 3・22、一色で朝昼公演

県立一色高等学校和太鼓部「いっしき」(大野匡善部長)の第14回演奏会は3月22日、ホームグラウンドと言える一色地域交流センターで行われる。

入場無料で、当日は「午前の部」と「午後の部」の2ステージ。時間はまず午前の部が午前10時、一方午後の部は午後1時30分それぞれ開演。開場は両方開演の30分前。

当日、演奏を予定している曲は「海祭(かいさい)」と「四季に生きる」や「愛郷(あいきょう)」と「伝統と創造」(大河「天地」など。現在複数のレパートリーを持つ同校和太鼓部は平成16年度、まず同好会として16年度、帆を張ると、同18年度に「和太鼓部」へ昇格。以来、毎年3月の単独公演

を続けている。「和太鼓部」は、こうした単独公演以外にも年間を通じて各地の老人ホームや地域の祭りなどにどんどん呼ばれてモテモテ。

また、平成22年度には、一色町との姉妹町交流で宮崎県田野町太鼓フェスティバルに参加したり、同28年度はCBCテレビのニュース番組「イッポウ」の中で生演奏をして話題に。14回目の今回もこうして部の歴史を築いてきたOBやOGとの競演も見どころの一つとなっている。

なお、主催者では「当日は駐車場を確保してあるが、台数に限りがあるため、乗り合わせて「来場ください」と呼びかけている。  
(浦野文昭)



一色高校和太鼓部「いっしき」の第14回演奏会の開催を知らせるチラシより

ベイ会  
協議  
南部  
尾西  
エリア

新メニューや体験、観光コース

# 一色町活性化へ活動発表

今まで個々に輝いていた魅力を結びつけ、三河湾に面した一色町に賑わいを創出して地域の活性化を促そうと設立された西尾南部ベイエリア協議会(山本浩二会長)は26日、2019年度の活動成果を報告する事業発表会を一色町の一色交流センターで開いた。



特産品を使った新メニューを発表する一色高生

プログラムの創造、観光案内人育成を二本柱にしてSNSでの情報発信などの事業を展開している。

「一色十色(いっしきといろ)をコンセプトにした活動は昨年度、内閣府及び農林水産省の第6回「ディスプレイ」農山漁村(むら)の宝」に認定され、優良事例に選ばれた。

発表会には約150人が参加。主催者あいさつに立った山本会長は、業者や学校、プロ、アマチュアと様々な人たちが地域の活性化で活動している状況を説明し、内閣府及び農林水産省の「ディスプレイ」農山漁村(むら)の宝」で優良事例に選ばれた。

来賓祝辞で中村健市長は、昨年のラグビーワールドカップの日本代表チームの活躍の原動力となった「ワンチーム」という言葉がよく使われている中、「いろいろな個性が一つのチームになると大きな力になる。まちづくり、地域の活性化も団体や市民が一つのチームになって取り組むために西尾南部ベイエリア協議会ができています。これからの発展を楽しみにしています」と今後に更なる活動に期待を込めた。

デザート感覚の「青春いちごみるく味」と、佐久島名産を使った「佐久サク大アサリ丼味」、お酒のつまみにもなる「欲しがらえびのアヒージョ味」の三つをセレクトにした「二色めいぶつえいせんべい」、リストランテ・キサクの和田圭太郎さんとsubacco li fedesign&Coの加藤寿枝さんが考案した「二色十色佐久島のり弁当」アルベアリーの市川永里子さんとcafe OLEGALEの加藤麻紀さんが考案した「二色十色海鮮スープカレー」の3品が紹介された。

試食会も開かれ、参加者は特産品を使った新しいアイデアの味を堪能。収納ボックスのパッケージもイラストをデザインした「一色めいぶつえいせんべい」は「口に入れるといちごミルクの甘い香りがして斬新的」「アヒージョ味は止まらなくなる味、一口サイズで提供されていた「二色十色

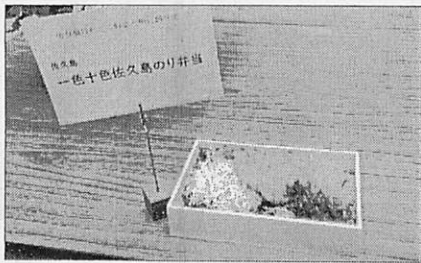


試食会で新メニューを味わう中村市長ら

## 一色高生ら特産品活かすアイデア

農林水産省の農山漁村振興交付金の農泊推進事業とつなげて発足した同協議会は、漁協や商工会、観光関係の11団体と西尾市で構成している。

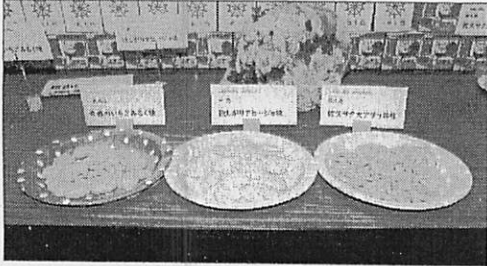
天の谷沢明教授、WABIの鈴木達朗さん、N S A B Iの鈴木達朗さん、P O 法人西尾幡豆まちづくの学生などの協力で特産品の新メニュー開発、体験プ



一色十色佐久島のり弁当



一色十色海鮮スープカレー



一色めいぶつえいせんべい

久島のり弁当は「弁当サイぶり」との音が寄せられた。歩などを説明、観光案内人育成講座の受講者おすずめは、愛知淑徳大の学生が「サクのいも収穫」や「佐久島の夜の暗闇を楽しむ」久島の謎解きスタンプラリー@愛知淑徳大学生「一色十色のまちぶらり散

久島のり弁当は「弁当サイぶり」との音が寄せられた。歩などを説明、観光案内人育成講座の受講者おすずめは、愛知淑徳大の学生が「サクのいも収穫」や「佐久島の夜の暗闇を楽しむ」久島の謎解きスタンプラリー@愛知淑徳大学生「一色十色のまちぶらり散

久島のり弁当は「弁当サイぶり」との音が寄せられた。歩などを説明、観光案内人育成講座の受講者おすずめは、愛知淑徳大の学生が「サクのいも収穫」や「佐久島の夜の暗闇を楽しむ」久島の謎解きスタンプラリー@愛知淑徳大学生「一色十色のまちぶらり散

# 一色や佐久島の魅力発信

## 新商品や体験プログラム

事業 発表会 西尾南部ベイエリア協議会

西尾市の一色地区全体で誘客を図ろうと一色うなぎ漁業協同組合など四団体で二〇一八年度設立された「西尾南部ベイエリア協議会」の令和元年度事業発表会が二十五日、同市一色地域交流センターで開かれた。特産品や新メニューの開発、体験プログラム、観光コースが、会員制交流サイト(SN



新メニューを発表する一色高校1年生

S)による情報発信などを実施してきた。協議会構成員と関係者による協働のもと、地域により活性化し、西尾南部ベイエリアがにぎわいのある地域になるよう、本年度事業の成果を報告する事業発表会を行う運びになった。

関係者約百二十人が参加したこの日、あいさつに立った会長の本庄浩二(一色うなぎ漁業協同組合)代表理事は「業種や世代などの垣根を超えて事業を進めている。地域活性化の優良事例を選定する国の『ディスカバー農山漁村(むら)の宝』に当協議会が選ばれ、昨年十二月、総理大臣官邸での授与式に参加した。レセプションで安倍晋三総理が私たちの席に立ち寄り、えびせんべいを食べて『あれ、これうまいね』と言ってもらえた。きつと東京の人が食べるのはコメのせんべいが多いと思う。東京でもっと宣伝し、一色のえびせんべいのおいしさを伝えていきたい』と述べた。

の中村健市長は「さまざまな団体や市民が、まぶくりを通して一つになるのは難しいが、当協議会は漁業、観光、飲食店、学生が協力し、見事ワンチームになっている」と祝辞を述べた。

NPO法人西尾幡豆まぶくり観光プロモーションの都築貴弘理事長が、同協議会の事業「一色十色(いっしき)という」について、ロゴマークやコンセプト、SNSによるPRなどを紹介した。SNSでは百九十七件の投稿を行い、計二万四千四百十八の「いいね」が付いたという。

続いて、地場産品を活用した特産品の開発について、一色高校生活デザイン科一年生が一色町のえびせんべい店「富士見屋」の指導で開発したイチゴチゴミルク味のえびせんべい、佐久島の喫茶店「オレガレ」の加藤麻紀さんが出張イタリア料理「アルペアーレ」の市川永里子さんの指導で開発した二色十色佐久島のり弁当、「一色町の喫茶店」スバコ」の加藤寿枝さんが



特産品を使った新メニューを味わう参加者

その後、試食に移り、来場者は担当者の話を聞きながら、味、見た目、お勧め度について五満点での評価を行い、適切な金額も提示した。えびせんべいはイチゴミルク味のほか、大アサリ丼味とえびのアヒージョ味があり、三つの味をセットにして売り出す。

このあと、愛知淑徳大学やモニターツアー参加者の協力で考案された体験プログラムの提案があり、▽「サクのいも」収穫▽量の小物作り▽佐久島の夜の暗闇を楽しむ▽えびせんべい手焼き▽サークルタオルで島時間

最後に、観光案内人おすめコースとして、一色のまち歩き・食べ歩きを楽しむ(一色のソウルフードを巡る)旅「一海外の観光客に佐久島を楽しんでもらおう!」の二コースが提案された。問い合わせは、西尾市佐久島振興課(電72-9607)へ。

同協議会の構成団体は次の通り。  
一色うなぎ漁業協同組合、西三河漁業協同組合、一色さかなセンター、西尾市観光協会、一色町商工会、衣崎漁業協同組合、島を美しくつくる会、佐久島観光の会、NPO法人西尾幡豆まぶくり観光プロモーション、三河一色さかな村、一色魚仲間人組合、西尾市佐久島振興課、同商工観光課、同農林水産課

一色高校生活デザイン科3年生

卒業作品展 「姫きもの・ドールハウス」

8日、錦城町の旧近衛邸 入場無料 来場歓迎

県立一色高校生活デザイン科3年生38人による卒業作品展「姫きもの・ドールハウス」は、8日午前10時から午後4時まで錦城町の

西尾市歴史公園内旧近衛邸で開かれる。入場は無料で、同校では次のように話し、多くの来場を歓迎している。

「姫きもの」とは、古い着物を再利用し、ミニチュアに仕立てた着物です。背中与袖の模様を一連につながるようにデザインしました。

また、姫きもの以外に「ドールハウス」の展示もあります。ドールハウスとは、一定の縮尺で作られた模型の家です。自分の好きな空間をイメージし、作り上げました。

このほか、ファッションデザインコース18人は当日、着物姿でおもてなしをします。

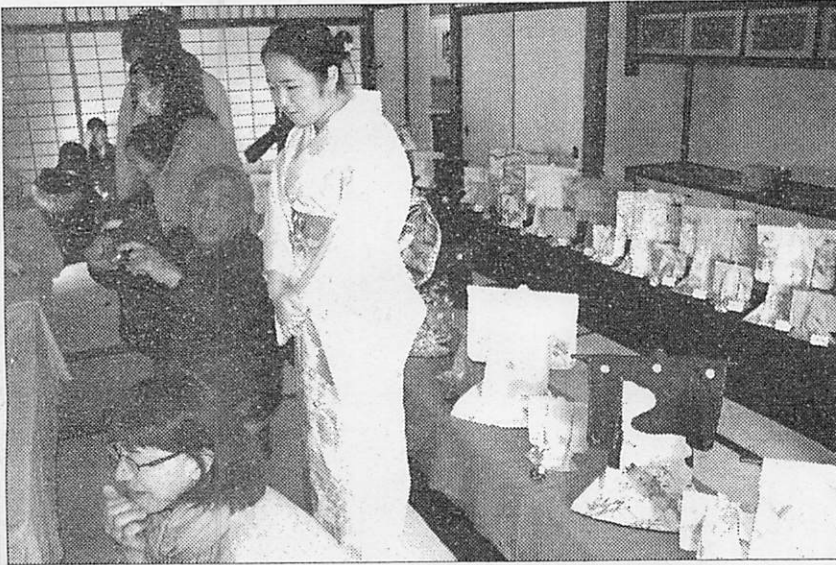


さらにフードデザインコース20人が焼き上げたクッキーを先着100人へプレゼントします。ぜひ、お越しください。

一色高生活デザイン科3年生

## 七色の卒業作品展

県立一色高校生活デザイン科3年生38人による卒業作品展「姫きもの・ドールハウス」が8日、錦城町の西尾市歴史公園内旧近衛邸であった。写真



アに仕立てた着物。一方の「ドールハウス」は、一定の縮尺で作られた模型の家。一日限定の卒業作品展では、ファッションデザインコースの18人は着物姿で作品について説明した。また、フードデザインコース20人が学校で焼き上げたクッキーを先着100人へ配って大変喜ばれた。

## ミニチュアの家や着物 一色高生が卒業作品展

展示された「姫きもの」と生徒たち



県立一色高校生活デザイン科の三年生三十八人が制作した「姫きもの」や「ドールハウス」を紹介する卒業作品展が八日、西尾市錦城町の同市歴史公園内「旧近衛邸」で開かれ、多くの人たちの目を楽しませた。

「姫きもの」は古い着物を「洗って」「干して」「アイロンがけ」といった工程で再生させ、ミニチュアサイズに仕立て直したものだ。生活デザイン科の生徒は、昨年夏から

授業の一環で約三十時間かけて制作した。

会場には、高さ五十センチほどの「姫きもの」二十三点を展示。また、「私のほつとできる空間」をイメージしたドールハウス六点も飾られた。

授業で着付けを学んだファッションデザインコースの生徒十八人は、着物姿でおもてなし。来場者に熱心に説明した。

「姫きもの」を制作した岡田萌さんと都築流那さんは「中には硬い生地もあって縫うのに苦労した。姫きものはすごく良い出来栄で満足している」と話していた。